

天保 11 年（1840）、大田和村百姓浅葉富蔵の旅

－「日光山・善光寺・秩父入湯順道覚」の検討を中心に－

藤井 明広

The journey of peasant Tomizo Asaba in Otawa village in 1840:
focusing on the study of the diary.

FUJII Akihiro

In this paper, the study of the journey of Tomizo Asaba who had lived in Miura experienced in the late modern period is considered. This study bases on the travel diary of Tomizo Asaba. As a result, this examination disclosed these three facts of the journey in 1840. First, it was the journey of the departure conducted in that year of establishing branch family. Second, Tomizo visited famous historic sites and hot springs in various places, regardless of the belief of Kannon. Third, Tomizo slipped through the checking station.

はじめ

近世は寺社参詣の旅を中心とした庶民の旅が盛んに行われた時代であった¹⁾。

本稿では、相模国三浦郡大田和村（現横須賀市）浅葉家に伝来した「日光山・善光寺・秩父入湯順道覚²⁾」の記述から、近世後期において三浦半島に住む百姓浅葉富蔵が経験した旅について検討する。

第 1 節 旅日記と浅葉富蔵

（1）旅日記原本

本稿で検討を行う「日光山・善光寺・秩父入湯順道覚」（横須賀市自然・人文博物館所蔵）（以下、旅日記）は、縦 31cm×横 12.6cm の横帳である。丁数は表紙を含

原稿受付 2021 年 12 月 17 日 横須賀市 博物館業績 第 769 号

Key Word : edo period Journey

キーワード：江戸時代 旅

めて 11 丁、表紙には「天保十一庚子年三月吉辰、日光山・善光寺・秩父 入湯順道覚、大田和 浅葉富蔵」と記され、天保 11 年（1840）3 月頃に日光（下野国）・善光寺（信濃国）・秩父（武蔵国）を目的地とした旅に出たことを窺わせる記述がなされている。また、この表紙の記述から旅日記の筆者は相模国三浦郡大田和村の浅葉富蔵であることが確認できる。旅日記の内容や具体的な目的地については後述するが、非常に淡泊な記述ながら大田和村から各目的地への行程や道中での見学地、渡し場の通行料に関する記述など、近世後期における庶民、それも三浦半島住人による旅の様子がうかがえる記録となっている。

（2）旅日記の著者・大田和村百姓浅葉富蔵

旅日記の著者である相模国三浦郡大田和村百姓浅葉富蔵についてみていきたい³。浅葉富蔵の生家である浅葉家は、代々大田和村の名主を務める家である。その出自は不明であるが、天正 19 年（1591）に没した仁左衛門を初代として、代々「仁左衛門」ないしは「仁右衛門」を称した。旅日記の著者である浅葉富蔵（1816～1892）は、この浅葉家歴代当主のうち 12 代当主仁右衛門（太市）と八代（やよ）の次男として出生する。富蔵はのちに仁三郎と改名するとともに、大田和村の浜方（小田和）に分家したので通称「浜浅葉」と称されている。富蔵（仁三郎）（以下、便宜的に富蔵で統一）から三代にわたって書き継がれた日記（天保～明治）は、「浜浅葉日記」と称され、とりわけ近世の庶民日記研究史上において貴重な史料として知られている⁴。なお、浅葉富蔵の生涯については先行研究で明らかになった事項についてまとめた【表 1】を参照頂きたい。では、浅葉富蔵の生涯にとって、この天保 11 年（1840）3 月～5 月の旅はどのような意味をもったのであろうか。

（3）浅葉富蔵の旅

天保 11 年（1840）の富蔵の旅は、彼が 25 歳（数え）の時の旅であり、同行者は富蔵の母（八代）・三ヶ浦伯母（親戚・小峰家）・仁平治の妻の 3 名であった。すなわち、百姓（名主層）の庶子（次男）と女性による旅である。旅の期間は、天保 11 年（1840）3 月 19 日～5 月 7 日の合計 47 日間であり、旅日記の表題や内容から日光、善光寺、秩父地域を主な目的地とする長期間の旅であった。

では、こうした長期間の旅は浅葉富蔵の生涯にどのように位置づくのだろうか。浅葉富蔵の生涯における旅の経験については、その日記「浜浅葉日記」の検討を通じて、前述【表 1】のように明らかにされている⁵。この【表 1】と照らして考える限り、天保 11 年（1840）における旅は、現在確認できる史料のうちでもっとも古い浅葉富蔵の旅である。そして、旅に出た天保 11 年（1840）という年は浅葉富蔵

が「浜浅葉」家として本家から分家し、「仁三郎」と改名した年と推定されていることも合わせて指摘したい⁶。富蔵の分家と天保 11 年（1840）の旅の関係性は史料的制約によって不明と言わざるを得ないが、富蔵にとって、まさに門出の年に経験した意義深い旅であったとみられる。では、次章において天保 11 年（1840）の旅の内容についてみていきたい。

第 2 節 旅の目的地と交通

本節では、天保 11 年（1840）の旅の行程と道中での出来事について検討する。

（1）旅の行程と目的地

本項では、天保 11 年（1840）3 月から 5 月にかけての旅の行程について検討する。まず、浅葉富蔵の主な旅の行程を確認したい。本稿で素材とする旅日記（「日光山・善光寺・秩父 入湯順道覚」）の表題を参考に旅の行程を 4 つに分け、全体像を示したのが【表 2】であり、旅日記の記述をもとにおおよその経由地を示したのが【図 1】である。また【表 3】は、旅日記の日ごとの出来事をまとめたものである。

浅葉富蔵たちが訪れた主要な目的地は、旅日記の表題にあるように日光、善光寺、秩父地域であった。すなわち、①日光では日光山輪王寺の支院である実教院を拠点に案内料を支払って日光東照宮石の間（「大石の間」）や日光三社への参詣、名瀑（華厳の滝、裏見の滝、霧降の滝）などの名所見物を楽しみ、②善光寺では、参詣のうち「御堂」に一晚参籠を行い⁷、③秩父地域では秩父三十四所観音霊場の巡礼を行っている。そのほか、各目的地を目指す道中においても、「観音様」の参詣を中心に名所見物などを行っている。とりわけ、江戸では「千澤先生」（詳細不明）と落ち合ったうえで永代橋などへ出向き、往路では旅に必要な笠や絵図を、帰路においても日本橋周辺で買い物をしている。また、日光から善光寺へ向かう道中において伊香保、草津、澤渡、渋湯に数日滞在して入湯するなどしている。各目的地で過ごす時間はもちろん、そこに至る道中での経験もまた旅の醍醐味であったといえよう。

以上のような動向からは、天保 11 年（1840）の浅葉富蔵の旅は、観音を中心とした信仰を基礎としながらも、それに終始することはなかった。険しい山道を移動しながら、現地では案内料を支払って名所見物に赴くとともに、複数の温泉地に滞在して「入湯」をも楽しむ旅であったことが指摘できる⁸。

（2）旅日記にみる関所の「裏越し」

続いて、浅葉富蔵の旅日記のうち特質すべき記述として、関所の通行に関する記述について検討したい⁹。まず、近世には幕府が設けた関所が全国に 53 ヶ所所在した。そして、この関所を通行するためには名主に願い出て「往来手形」を発行して

もらう必要があり、男性の場合には、箱根関所を除いておおむねこの「往来手形」で通行できた¹⁰。しかしながら、女性が特定の関所を通る場合には、「往来手形」とは別に名主を通して領主権力から「関所女手形」の発行を受ける必要があり、これは人質として江戸に住んでいた諸大名の妻子が逃げ出さないように監視するために行われた措置であった。よって、近世における女性の旅は、さまざまな場面で男性に比して厳しいものであったことが知られる。とりわけ関所の通行にあたっては関所女手形との人相の照合など煩わしい事柄も多く、時には関所改めを受けずに通り抜けを行う「関所抜け」が行われていたことが明らかにされている¹¹。では、浅葉富蔵ら一行の場合はどうであったのだろうか。浅葉富蔵の旅日記にはいずれも上野国の関所である五料関所（【史料1】）、大戸関所（【史料2】）、西牧関所（【史料3】）を通行した際の様子が記されている。次の記事を確認したい。

【史料1】

同四日

(八木)

や木へ半リ

(太田)

大田へ二リ十町

(朱書)「新田大光院松山ニ松茸あり」 千年屋ニ中喰

此間ニ舟渡しの川有、壺人前十六文ツ、

木崎へ壺リ四町

芝へ三リ廿八町

(石カ)

同所中町 右 かわにて入升屋ニ頼、御関所裏こし度々候、十町計上にて板東太郎の渡し

尤入升屋と申ハ町役人にて候、是方案内を添上へ行わたり壺人前八十文ツ、是迄案内料四人にて六十四文也、遣し候、是方玉村宿へ近道をし、

子供を頼案内ニいたし

玉村宿へ二リ半

井筒屋泊

都合九リ也

【史料2】

伊香保残り三人のミ

十五日同所出立、都合壺廻半入湯いたし、夫より榛名山へ参けいゐたし、大戸の御関所を越て、須ヶ尾ニ泊リ、此御関所女ニても壺人前貳百文ツ、

(候カ)

頼ミ候得者過る也、御関所裏越しいたし候方道近にて通よし、尤大戸方手前にてきゝ候て右へ入、此間御関所無、近みちにて道順よし

【史料3】

廿四日

(根小屋)

ねごやへ二リ

(マ マ)

うるしかやへ一リ半の峠

(中之嶽)

是方右ニ入ハ中のたけ、妙義山へ近し

本宿へ半リ

御関所あり、女ハ案内を頼裏越し、案内料何人ニても百文也（後略）

右の史料は順番に、五料関所・大戸関所・西牧関所の記述である。いずれの関所でも、地元の者へ案内を頼み、関所を「裏越し」したことを窺わせる記述が確認できる。とりわけ、五料関所では日光例幣使街道の宿場・柴宿中町の町役人「入升屋」の手引きで「裏越し」したことが窺え¹²、西牧関所では明確に「御関所あり、女ハ案内を頼裏越し、案内料何人ニても百文也」と、女性たちが「裏越し」をしたことを記している。すなわち、この「裏越し」こそ「関所抜け」を指すものとみられる。関所破りは死刑の重罪であるが、案内料を支払えば地元民の手引きによって関所抜けが行われていたことが知られていた¹³。浅葉富蔵ら一行、特に女性たちは関所を通るたびに「裏越し」をしているのである。出発当初から種々の煩わしさを厭い「裏越し」をするつもりであったのか、関所女手形の取得を失念していたための偶発的な行動なのか、詳細は不明である。

また、浅葉富蔵らは3月25日に栗橋・中田宿を経て日光へ向かっているため、栗橋関所（房川渡し）を通行したと考えられるがその記述は管見の限り確認できない。しかし、旅日記には「(※幸手方面から)橋をこし、右ニつくば山道と大石ニしるし有、是へ向少し行、本(元)くり橋の渡しあり、女壺人前百五文也、此間番多し¹⁴」と、栗橋宿の手前に位置する元栗橋（現茨城県猿島郡五霞町）の渡し場を通ったことを窺わせる記述があり、しかも女性の川渡し賃のみを記している。あわせて周辺に番が多かった様子も書き付けている。またこの記述に続いて、「是方壺里程行、川つまの渡、此わたし男壺人二十四文ツゝ、女壺人前七拾貳文ツゝ也、是方壺里計行、中田宿へ出る、此間本道方格別の廻りてなし」と富蔵の母ら女性たちが男性（富蔵）に比して三倍の運賃を支払って川妻の渡し（「川つまの渡し」）を通っていること、「本道方格別の廻りてなし」とまわり道を選んで通行しようとしていることが窺える。川妻の渡しとは、栗橋関所の手前に位置する現在の茨城県猿島郡五霞町大字川妻付近に設けられた渡し場と考えられる。こうした記述を考え合わせるならば、浅葉富蔵ら一行は、幸手から栗橋関所を避けるように迂回して「本(元)栗橋の渡し」から権現堂川を越えて元栗橋へ至り、続いて川妻の渡し（「川つまの渡し」）か

ら利根川を渡り、そこから中田宿を目指したものと考えられる¹⁵。すなわち、浅葉富蔵ら一行は関所を避けるルートを選択して旅をしていた可能性が指摘できよう。

おわりに

本稿では、天保 11 年（1840）における大田和村百姓浅葉富蔵（名主家次男）の旅日記の検討を通して、近世後期における庶民の旅の様子を検討した。本稿での検討を通して、明らかとなった事柄は次の通りである。

①天保 11 年（1840）は、富蔵が「浜浅葉」家として本家から分家し、「仁三郎」と改名した年とされている。すなわち、本稿で検討を行った天保 11 年（1840）3 月～5 月にかけての旅は、富蔵にとって門出の年に経験した旅であった。

②浅葉富蔵ら一行の旅は、観音信仰を中心とした寺社参詣に終始することなく、案内料を支払っての名所見物、数日間の温泉地滞在をも楽しむものであった。

③浅葉富蔵らは、「関所抜け」をして旅をしていた。

以上、若き日の浅葉富蔵（のち仁三郎）の旅について検討してきた。では、こうした旅の経験が、その後の富蔵の人生にどのような影響を与えたのだろうか。こうした事柄については今後の課題である。

-
- 1 近世中ごろ以降、庶民の旅が娯楽化し盛んにおこなわれたとされる。こうした背景には、古代や中世とは異なり、全国の政情が安定し、また宿場や街道の整備がなされるなど 18 世紀初頭には安心して旅ができる世の中になっていたとされる（もちろん盗難など凶事がまったくなかったということではない）。庶民の旅について概説的にまとめたものとして、板坂耀子『江戸の紀行文』（中公新書、2011 年）など。
 - 2 「日光山・善光寺・秩父入湯順道覚」（横須賀市自然・人文博物館所蔵）。特に出典を記さない史料の引用や旅日記の内容は、本史料に拠る。
 - 3 特に注記が無い限り、「解説（一）」（横須賀市史学会編『相州三浦郡大田和村浅葉家文書第一集 浜浅葉日記（一）』（1980 年、横須賀市立図書館））および辻井善彌『幕末の農民日記にみる世相と暮らし』（丸善プラネット株式会社、2011 年）に拠る。
 - 4 高木俊輔『近世農民日記の研究』（塙書房、2013 年）。なお、「浜浅葉日記」は横須賀市史学会編『浜浅葉日記（一）～（六）』（横須賀市立図書館）として、史料集が刊行されている。
 - 5 詳細は辻井善彌『幕末を旅する村人』（丸善プラネット株式会社、2015 年）参照。そのほか「浜浅葉日記」を分析した成果として、辻井善彌『幕末の農

-
- 民日記にみる世相と暮らし』(丸善プラネット株式会社、2011 年)、同『幕末のスローフード』(夢工房、2003 年)なども合わせて参照頂きたい。
- 6 前掲、「解説(一)」(横須賀市史学会編『相州三浦郡大田和村浅葉家文書第一集 浜浅葉日記(一)』(1980 年、横須賀市立図書館))。
 - 7 意外にも「善光寺詣り」で知られた善光寺滞在が一夜の参籠のみであり、旅日記の記載も淡泊である。しかしながら、草津で宿泊した宿の主である湯本平兵衛から兄・浅葉仁右衛門宛てられた書状には「此度者富蔵様其外皆々様、善光寺御参御序御立寄」(「書簡」([天保 11 年] 4 月 18 日付、湯本平兵衛→相州大田和邨浅葉仁右衛門宛)(当館所蔵))とあり、今回の旅の主要な目的地となっていたことが確認できる。
 - 8 谷釜尋徳は、通説では近世における旅人の 1 日の歩行距離は約 10 里(約 39km)とされているのに対して、東北庶民の旅日記の検討を通して 1 日の歩行距離平均を 34.1km と算出し、実際には 10 里より若干短かったことを指摘する。また、1 日の歩行距離には男女差があることや雨天の場合には歩みが遅くなることが指摘している(同『歩く江戸の旅人たち』(晃洋書房、2020 年))。
 - 9 金森敦子『関所抜け江戸の女たちの冒険』(晶文社、2001 年)、前掲、同『江戸庶民の旅・旅のかたち・関所と女』(平凡社新書、2002 年)、原淳一郎『江戸の寺社めぐり』(吉川弘文館、2011 年)を参照。
 - 10 江戸時代の往来手形は、旅人自身の身許証明も兼ねており、旅行難民となった際には往来手形によって身許を確認されたうえで、本人が村送りを望めば宿継・村継で国元へ送還してもらうことができた。こうした往来手形を活用した旅行難民の保護・救済体制の成立と展開については、柴田純『江戸のパスポート・旅の不安はどう解消されたか』(吉川弘文館、2016 年)参照。
 - 11 深井甚三『近世女性旅と街道交通』(桂書房、1995 年)、前掲、金森敦子『関所抜け江戸の女たちの冒険』(晶文社、2001 年)、前掲、同『江戸庶民の旅・旅のかたち・関所と女』(平凡社新書、2002 年)、同『きよのさんと歩く・大江戸道中記』(ちくま文庫、2012 年)など。
 - 12 「入升屋」とは、日光例幣使街道の宿場町柴宿の間屋・年寄を勤めるとともに、旅籠屋を営んでいた市左衛門と考えられる、丹治健蔵「江戸時代後期における宿駅の実態・日光例幣使街道柴宿及び八木宿を中心として」(『法政史学』15 号、1962 年)。町役人が関所抜けの手引きをしていたことは、関所抜けが慣例化し、地元住民の稼ぎとなっていたことを窺わせる。

-
- 1 3 前掲、金森敦子『関所抜け江戸の女たちの冒険』（晶文社、2001 年）。例えば、安政 2 年（1855）、幕末の尊攘派の志士として知られる清河八郎が母親を連れて無手形で伊勢参宮をした記録として『西遊草』があり、非合法の関所抜けが慣例化し、街道稼ぎにもなっていたことが指摘されている、山本志乃『旅日記にみる近世末期の女性の旅』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第 155 集、2010 年）。
- 1 4 安永 4 年（1775）に日光道中と筑波道の分岐点に建てられた石碑が現在も市指定史跡として存在する。この分岐点を筑波道方面に歩みを進めると、元栗橋（現茨城県猿島郡五霞町）に至る。
- 1 5 久喜市教育委員会文化財保護課編『久喜市の歴史と文化財① 日光道中栗橋宿・栗橋関所』（久喜市教育委員会、2020 年）によれば、平野部の河川では各地に渡河する場所があり、その隙を狙えば抜け道を使って容易に関所抜けが行われていたことが指摘されている。寛保 2 年（1742）3 月には、関所前後の渡船場を利用して女性が往来しているという噂が立ち、近隣書村の村役人が代官所に呼び出されて注意を受け、請書を提出。近隣に居住する女子の往来であっても著しく制限されていた。実際に、明和元年（1801）9 月に栗橋関所を避けて内国府間村（現埼玉県幸手市）から元栗橋へ舟で関所抜けをした男女が関所破りをしたとして磔になったという。男女は大金を盗んだうえに、不義密通をして逃亡中であった。

【表 1】浅葉富蔵（仁三郎）関係年表

和暦	西暦	年齢 (数え)	出来事
文化 13	1816	1	相模国三浦郡大田和村名主浅葉仁右衛門と母やよの二男として出生。幼名富蔵。
天保 5	1834	19	日記を書き始める（5 月で中断）。
天保 11	1840	25	富蔵、母ら合わせて 4 名で江戸、日光、善光寺、秩父などへ旅に出る。
			「小田和ノ里」（小田和）に分家。分家を機に仁三郎と改名カ。
天保 15	1844	29	相模国三浦郡堀内村小峰家（三ヶ浦）の娘（兄嫁の妹）と結婚。
嘉永 7	1854	39	浦賀へ黒船を見に行く。兄仁十郎の家督相続。
安政 2	1855	40	父、船にて湯河原へ湯治。のち父死去。
文久 3	1863	48	熱海の湯を船で運び自宅で湯治。
明治 2	1869	54	兄死去。仁三郎本家兄の二男保蔵を養子にもらう。
明治 3	1870	55	日記の執筆者は仁三郎から保蔵へ。
明治 5	1872	57	夫婦で信州善光寺参り（約 2 ヶ月）。
明治 6	1873	58	保蔵、相模国三浦郡林村名主清左衛門娘と結婚。
明治 25	1892	77	仁三郎死去。
明治 36	1903	-	妻ちせ死去。

出典：「解題（一）」（『相州三浦郡大田和村浅葉家文書第一集 浜浅葉日記（一）』（横須賀市立図書館、1980 年））、

「表 1-1」（辻井善弥『幕末を旅する村人』（丸善プラネット、2015 年））を参考に加筆、修正。

【表 2】旅の主な行程（浅葉富蔵の動向を中心に）

ルート	行程
①【往路】大田和村～日光	大田和村→三ヶ浦（「鎌倉迄舟にて行」）→鎌倉→戸塚宿→川崎宿→大森村→馬喰町（「富蔵は千澤氏と会い永代橋等へ、同行者 3 名（女性）は深川へ寺参り」、「笠を買」・「道中絵づ求」）→浅草（「浅草観音様へ参り」）→上野→巢鴨（「徳本上人様御寺へ参り」）→王子→草加→越谷→粕壁→杉戸→幸手→元栗橋の渡し（「本栗橋の渡し」）→川妻の渡し（「川つまの渡」）→中田宿→古河→野木→間々田→小山→新田→小金井→石橋→雀の宮→宇都宮→徳次郎宿（「徳二郎」）→今市→鉢石→日光（「御本社大石の間拝見」、「中禅寺より坂東十八番観音様へ参けい」、「花厳の滝」、「荒澤うら見たき」、「霧降の滝律院へ行」）
②【往路】日光～善光寺	日光→鉢石→今市→板橋→文挾→鹿沼→栗野→加園（「かぞう」）〔加園→栗野カ〕→永野（「長野」）→出流（「坂東十七番」（満願寺）、「観音様へ参けい」、「大日様の岩屋」、「大師の岩」）→葛生→岩舟（「奥の院掛こし」）→佐野→川崎→築田宿→八木→太田→木崎→柴→五料関所→玉村宿→倉賀野→柏木沢（「柏木」）→水澤（「水様の観音様」）→伊香保（同行者 3 名は 4/5～4/15 まで間滞在、富蔵は 4/5～4/9 で伊香保を後にして榛名山へ）→榛名山→長藤→原町→澤渡→生須→草津（「当所二而所々二名湯あり」、草津で同行者 3 名と合流）→渋湯（「しら根山を越し、此所極難所、峠三リ計の間雪にて凡九尺方丈位と申事二候、馬往来なし、夏二至り牛往来あし候、此間茶屋二軒程有、未人なし」）→中野→浅野→吉田→善光寺（「善光寺様参けい」、「手前ハ御堂二こもり、三人ハ藤屋ニ泊り」）
③【往路】善光寺～秩父地域	善光寺→丹波島→屋代（「八代」）→下戸倉→坂城→上田→海野→田中→小諸→追分→初鳥屋→根小屋→本宿→西牧関所→妙義山（「菅原の天満宮有参けい」、「妙義へ参けい」）〔同行者 1 名は駕籠で先に一ノ宮へ〕→一ノ宮→吉井（「火打の名物有」）→白石→平井→渡瀬→鬼石→秩父地域で三十四所観音霊場・坂東三十三観音など巡礼（水潜寺→菊水寺→法性寺→観音院→賛川→三峯山（同行者 3 名は賛川逸見忠兵衛方宿泊、富蔵のみ三峯山へ登り、同所宿泊）→法雲寺→長泉院→橋立堂→大淵寺→円融寺→久昌寺→法泉寺→音楽寺→童子堂→観音寺→岩之上堂→龍石寺→神門寺→定林寺→西光寺→少林寺→今宮坊→慈眼寺→野坂寺→常楽寺→大慈寺→明智寺→西善寺→ト雲寺→法長寺→語歌堂→金昌寺→常泉寺→真福寺→四萬部寺→慈光寺→正法寺→「松山の稲荷」（箭弓稲荷神社カ）→岩殿山安楽寺（「吉三（見）の岩殿」）
④【帰路】秩父地域～大田和村	岩殿山安楽寺附近、鈴木治兵衛方→鴻巣→桶川→大宮→浦和→蕨→板橋→日本橋（「買物いたし」）→芝→水天宮参詣（「水天句様へ参けい」）→保土ヶ谷宿→三ヶ浦→大田和村

出典：「日光山・善光寺・秩父入湯順道覚」（当館所蔵）

【表3】浅葉富蔵の旅の行程

月	日	事項	移動距離の記載
3	19	相模国三浦郡大田和村百姓浅葉富蔵は母とともに自宅を出発し、「三浦内」（小峰家カ）にて宿泊。	-
3	20	雨天。「三浦内」（小峰家カ）にて宿泊カ。	-
3	21	「三浦内」から出立。三ヶ浦伯母、仁平治妻を加えた、都合4名で旅に出る。鎌倉までは舟で移動。戸塚宿伊勢屋にて昼食をとる。同日は川崎宿相模屋に宿泊。	-
3	22	川崎大師（「大師」）を経由して大森駿河屋にて昼食、高輪にて休憩をとる（「高な輪にて休」）。その後、芝増上寺へまわり、富蔵は山下谷へ行き千澤氏（「千澤氏」・「千澤先生」）と合流して永代橋へ行く。一方、三ヶ浦伯母と母の2人は深川の「御寺」へ赴く。同日は馬喰町足茂屋林蔵方にて宿泊（千澤氏も宿泊）。この日、笠と道中絵図を買い求める。	-
3	23	浅草観音様へお参り。のち、上野へ行き、同所で昼食をする。巢鴨まで千澤氏を送ってここで別れる。「徳本上人様御寺」（場所不明）へ参り、それから王子に赴く。同日は王子にて宿泊。なお、王子では稲荷の開帳が行われていた。	-
3	24	千住宿から草加、越谷（昼食）を経て、粕壁に至る。同日は粕壁高砂屋にて宿泊。	7里
3	25	粕壁から杉戸、幸手を経て、元栗橋の渡し（「本くり橋の渡し」）で権現堂川を越えて元栗橋に至り、続いて川妻の渡し（「川つまの渡」）で利根川を渡り、栗橋関所を避けて中田宿に至る。さらに中田宿から古河へ至り古河の野村屋に宿泊。	-
3	26	雨天。古河から野木、間々田、小山、新田（昼食）、小金井、石橋へ至る。当日は石橋の「たば粉屋」にて宿泊。	8里
3	27	雨天。石橋より雀宮、宇都宮に至る。当日は宇都宮の粕屋仙右衛門方にて昼から宿泊。雨天ゆえに3里半のみ進む。	3里半
3	28	雨天。宇都宮から徳次郎宿、上徳次郎、大澤（昼食）、今市、鉢石を経て七ツ時に日光山輪王寺の支院・実教院（宿坊）へ到着。	-
3	29	早朝に寺社（場所不明）参詣。つづいて本社（現日光東照宮）の大石の間を拝見（1人あたり銀1匁5分、上下料48文）。それより三社【新宮（現二荒山神社）行者堂、別所（現滝尾神社）三本杉へ行、本宮（現本宮神社）】へ赴き実教院（「御寺」）に帰る。この案内料（三社めぐりカ）は1人20文ずつ。さらに青滝観音、女人堂へ行。富蔵は中禅寺から「坂東十八番観音様」へ参詣し、華嚴の滝、荒沢裏見の滝へ行く。案内料として「中禅寺行」300文、「華嚴廻り」50文、「うら見廻り」100文を支払い。当日は実教院（「御寺」）に宿泊。	-
4	1	早朝、実教院（「御寺」）を出発。霧降の滝、「律院」（場所不明）へ行く。のち鉢石へ出る。「案内料」（霧降の滝案内料カ）として150文を払う。のち、鉢石から今市、板橋、文挾、鹿沼（昼食）へ至り、鹿沼宿の中屋に宿泊。	7里33町
4	2	雨天。鹿沼宿から栗野、加圖（「カソウ」）、永野（「長野」）を経て、出流（「いつる」）へ至る。出流では、出流山満願寺（坂東三十三観音17番札所）を参詣し、「観音様」・「大日様の岩屋」・「大師の岩」を見学する。但し、いずれの場所も女性が行くには厳しい場所であったため、富蔵以外の女性3名は見学には行かず（「此所女人ハ不行、極難所也」）。「山役銭」（見学料カ）として3ヶ所合わせて、男性1人あたり169文を支払う。この日は出流辺りの万屋源蔵方に宿泊。	6里
4	3	宿所から葛生、岩舟へ至る。のち奥の院（高勝寺）門前の大黒屋（昼食）、佐野、川崎を経て、「坂東二郎の渡し」（1人あたり28文支払い）、岸をあがり梁田宿に至る。梁田宿の玉屋に宿泊。	10里
4	4	梁田宿から八木、太田（千年屋にて昼食）、舟渡しの川（1人あたり16文支払い）、木崎、柴（「芝」）を経て玉村に至る。当日は玉村宿并簡屋に宿泊。なお、五料関所（「御関所」）を通行するにあたっては入升屋を頼み関所を抜ける（「御関所裏こし」）。関所を抜けてからは、玉村宿までの道は子どもに案内を頼み、近道をする。	9里
4	5	玉村宿から倉賀野、高崎（昼食、馬を二足頼み柏木沢（「柏木」）まで〔664文払う〕）、柏木沢（「柏木」）を経て同日七ツ時に伊香保の大崎甚左衛門方へ至る。道中には白岩山長谷寺（坂東三十三観音15番札所1）の「白岩の観音様」、五徳山水澤寺（同16番札所）の「水澤観音様」があることを記す。	-
4	6	（一行、伊香保に滞在）	-
4	7	（一行、伊香保に滞在）	-
4	8	（一行、伊香保に滞在）	-
4	9	浅葉富蔵は母ら女性3名を残して、単身伊香保を出立して榛名山へ参り、長藤峠を越えて澤渡へ行く。伊香保では都合4泊。当日は、澤渡の湯本太郎左衛門方にて宿泊。	11里
4	10	澤渡から生須（現群馬県吾妻郡中之条町）の難所を経て、同日七ツ時に草津の湯本平兵衛方へ到着。伊香保に滞在する母ら同行者の到着を待つ。	6里
4	11	（富蔵、澤渡に滞在。同行者3名は未だ伊香保滞在。）	-
4	12	（富蔵、澤渡に滞在。同行者3名は未だ伊香保滞在。）	-
4	13	（富蔵、澤渡に滞在。同行者3名は未だ伊香保滞在。）	-
4	14	（富蔵、澤渡に滞在。同行者3名は未だ伊香保滞在。）	-
4	15	伊香保に残っていた母らが伊香保を出立（母らは、入湯のため都合一週り半、伊香保に滞在）。それから榛名山へ参詣し、大戸の関所（「大戸の御関所」）を越えて、須賀尾（「須ヶ尾」）に宿泊。なお、大戸の関所は女性でも通行料1人200文ずつであったが、「本宿」に頼み、関所抜け（「御関所裏越し」）をして近道する。	-

4	16	同行者3名は、須賀尾（「須ヶ尾」）より長野原を経て、草津の湯本平兵衛方へは同日七時に到着。浅葉富蔵ら合流する。	
4	17	（一行、草津に滞在。）	-
4	18	（一行、草津に滞在。）	-
4	19	草津を出立して「洪湯」（洪温泉）へ行く。この草津から「洪湯」へ進む峠道は厳しいものであったようで、とりわけ白根山を越える峠道は「極難所」であり、峠には雪が9尺～1丈位積もっていたことを記す。このため夏には牛が往来する（「牛往来みだし」）峠道も、浅葉富蔵が訪れた時期には「馬往来なし」、また峠にあった二軒程の茶屋にも「未人なし」と記す。この日は「洪湯」の津幡屋忠右衛門方に宿泊。	-
4	20	「洪湯」から中野、浅野、吉田を経て善光寺に至り、当日七時に大門町藤屋平左衛門方へ到着。この日、善光寺へ参詣した後、浅葉富蔵は「御堂」に籠り、母ら女性3人は藤屋へ宿泊。	7里
4	21	善光寺を出立し、丹波島を経て、屋代（「八代」）へ至る。当日は丸屋安兵衛方に宿泊。	4里5丁
4	22	屋代（「八代」）から下戸倉、坂城、上田、海野を経て、田中へ至る。当日は田中屋代蔵方へ宿泊。	8里半
4	23	田中から小諸、追分を経て、初鳥屋へ至る。当日は間屋軍蔵方へ宿泊。	10里
4	24	初鳥屋から根小屋、本宿を経て、一ノ宮へ至る。本宿から一ノ宮へ至る道中では、浅葉富蔵ほか同行者2名は「妙義」へ参詣してから一ノ宮へ行き、残りの同行者1名は本宿から一ノ宮までそのまま籠で移動した。当日は笠原太兵衛方に宿泊。なお、西牧関所（現群馬県甘楽郡下仁田町）では、浅葉富蔵以外の母ら同行者3名については「案内」を頼んで関所抜け（「裏越し」）をする。関所抜けの案内料は何人であっても100文。	-
4	25	一ノ宮から吉井（「火打の名物有」）、白石、平井、渡瀬を経て、鬼石へ至る。当日は井筒屋藤平へ宿泊。	7里
4	26	鬼石より日沢山水潜寺（秩父三十四所観音霊場34番札所（「上り山坂にて難所」）、現埼玉県秩父郡皆野町）、延命山菊水寺（同33番（「難所」）、現埼玉県秩父市）へ参詣。当日は、般若山法性寺前（「廿二番観音様手前」）の柴崎藤十郎方に宿泊。	7里半
4	27	般若山法性寺（秩父三十四所観音霊場32番札所、現埼玉県秩父郡小鹿野町）、鷲窟山観音院（同31番札所、同左）へ参詣後、賛川へ至る。女性3名は賛川の逸見忠兵衛方へ宿泊し、浅葉富蔵はそのまま賛川から三峯山へ登り、同山の「御寺」に宿泊。	-
4	28	浅葉富蔵は三峯山から「大日向」（「登り下り也、難所」、場所不詳）、「落川」（場所不詳）、白久を経て、順番に瑞龍山法雲寺（秩父三十四所観音霊場30番札所、現埼玉県秩父市）、笹戸山長泉院（同29番、同左）、石龍山橋立堂（同28番、同左）、竜河山大淵寺（同27番、同左）、万松山円融寺（26番）、岩谷山久昌寺（同25番、同左）、光智山法泉寺（同24番、同左）へ参詣し、水鳥屋亀八方に宿泊。亀八方では案内を1日300文で依頼している。	-
4	29	亀八方から順番に松風山音楽寺（秩父三十四所観音霊場23番札所、現埼玉県秩父市）、華台山童子堂（同22番、同左）、要光山観音寺（同21番、同左）、法王山岩之上堂（同20番、同左）、飛瀧山龍石寺（同19番、同左）、白道山神門寺（同18番、同左）、奥正山定林寺（同17番、同左）、無量山西光寺（同16番、同左）、母巢山少林寺（同15番、同左）、長岳山今宮坊（同14番、同左）を参詣し、近江屋宿清水屋にて昼食。その後、旗下山慈眼寺（同13番、同左）、仏道山野坂寺（同12番、同左）、南石山常楽寺（同11番、同左）、万松山大慈寺（同10番、現埼玉県秩父郡横瀬町）、明星山明智寺（同9番、同左）、清泰山西善寺（同8番、同左）、向陽山ト雲寺（同6番、同左）、青苔山法長寺（同7番、同左）、小川山語歌堂（同5番、同左）を参詣し、関口の若林又右衛門方に宿泊。	-
5	1	宿所から高谷山金昌寺（秩父三十四所観音霊場4番札所）、岩本山常泉寺（同3番、同左）、大棚山真福寺（同2番、同左）、誦経山四萬部寺（同1番、同左）、都幾山慈光寺（坂東三十三観音9番札所）を参詣し、山口与兵衛方へ宿泊。	-
5	2	宿所から巖殿山正法寺（坂東三十三観音10番札所）、「松山の稲荷」（箭弓稲荷神社カ）、岩殿山安楽寺（同11番、「吉三（見）の岩殿」）を経て、鴻巣に至る。当日は鈴木治兵衛方に宿泊。	-
5	3	宿所から勝勝寺へ参詣し、桶川、上尾、大宮、浦和、蕨を経て、板橋に至る。丸屋に宿泊。	-
5	4	宿所から日本橋に至る。浅葉富蔵は同所にいる間に買物をする。芝（江戸）で宿泊。	-
5	5	「水天宮様」（水天宮）へ参詣したのち、保土ヶ谷宿に至る。水屋に宿泊。	-
5	6	昼頃に三ヶ浦（親戚小峰家）へ到着。	-
5	7	浅葉富蔵（と母）は自宅である大田和村へ帰宅。	-

出典：「日光山・善光寺・秩父 入湯順道覚」（当館所蔵）

